
僕たちが結ぶ物語 -the beginning story-

湊昊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちが結ぶ物語 — the beginning story —

【Nコード】

N5853U

【作者名】

湊昊

【あらすじ】

チャットで出会った5人がお互いの過去に触れ、衝突し、助け合う物語。

幾多の出会いを重ねる彼らはその絆を結び、そして解いていく……

成長した彼らを待ち構えるものとは！？
そして、5人の関係はどうなるのか！！

シリ阿斯多めの純愛コメディ（？）が始まります！！

O P e r i o d (前書き)

ネットで書く、と言うのは初の試みになりますが
どうか温かい目で見守ってください。

O P e r i o d

とある家庭に仲の良い兄妹がいた。

歳は離れてはいたが、とてもとても仲良しだった。遊ぶ時も出かける時も寝る時も：

いつも一緒に小さな兄妹。

家庭もそれなりに裕福で、幸せだった。

温かな日々がずっと続く、そう思っていた。

そんなある日、妹は――――

――死んだ。

壊れた日常、涙する両親。

それらを目にして兄は思うのだった。

『もう、悲しみは見たくない』

ここから始まるのはネットで結ばれた5人の悲しみと感動と絆……
そして恋の物語。

事実を元にしたハーフノンフィクション。

――――さあ、O P e r i o d（出発点）は打たれた――――

O P e r i o d (後書き)

皆さん、

おはようございます。

こんにちは。

こんばんは。

これを読んでくださった貴方はどの時間帯でしょうかね（笑）

さて、私にとってこの作品はネットで初めて書く小説に当たります。

この話は序章と言う事もあり、短めですがネットならではの「空白」を活かして書いてみたつもりです。

これから展開する物語をどうかお楽しみください。

第1話「始まりの2人」(前書き)

作成期間1時間半・・・

誤字脱字にはご了承ください。

第1話「始まりの2人」

初夏の生温かい風が吹き、蟬の鳴き声も徐々に増していく7月5日。

澄み渡る快晴……

何処までも吸い込まれる様な青い空を見上げ、目を閉じた。

僕は倫畝駅シナセのエントランスホールにいた。

倫畝市。

千葉県西部に位置するこの街は、都心から比較的近く、人々が賑わう豊かな街だ。

そしてここ、倫畝駅もそれに漏れることなく、今日も人々で混雑していた。

日曜だからか、いつにも増して人が多い。

普段の僕ならこんな人混みへ足を運ぶことは絶対に無いだろう。しかし、今日は大事な予定のためにここにいる。

僕こと、那ノ波龍靜ナノハユウセイは倫畝市に在住。身長170cm、体重55kgと少々痩せ型ではあるが、傍から見ればごく普通の高校2年生である。

趣味は読書に音楽、そしてアニメ鑑賞。俗に言うオタクだ。

そんなこともあり、僕はインターネットで会話：所謂チャットをするのが日課だ。ネット上では「リュウ」と名乗っている。

ある日、いつもの様にPCを立ち上げる。そして、早速掲示板を見ると

『オフ会やろー!!』

……何の脈絡もなく、そう書かれていた。更新日時からして、ほんの数分前のカキコミのようだ。

僕はすぐにそれに返答をする。

『いきなり何言ってるんだよ、アオ』

そう、この突然なカキコミをしたのは僕のチャット仲間の「アオ」であった。

本名は長瀬蒼依。ナガセ アオイ僕の2つ下で中学3年生らしい。性格は明るく、誰にも好かれやすいタイプだ。

僕と彼女は結構知り合ってから長く、リュウ兄と呼んで慕っている。今ではメールや電話をしたりもしている。

そんな彼女からの一言だ。無視は出来ない。

すると、すぐに返事が返ってきた。

『なにして、みんなで会って遊ぼうって言ってるんだよ!』

僕もすぐに書き込みをした。

『そんな事は分かってる! いきなりすぎるだろうって言ってるんだよ』

『えー、だって行きたいじゃん！ リュウ兄は嫌なの？』

「……」

答えになっていない気もするが、僕はそれ以上書き込めなかった。

正直、オフ会自体は嫌ではない。寧ろ賛成しても良いと思う。

でも、不思議なことに素直に賛成出来なかった。

何で賛成できないんだ？ でも、今更賛成するのもおかしいよなあ。

首をひねり、悩んでいると新たにカキコミがされた。

『オフ会やっても良いんじゃない？』

誰だ？

僕はすぐに名前を確認する。そこには「るりりん」と書いてあった。

ああ、ルリさんか。

本名は上原瑠璃^{ウエハラ ルリ}。歳は僕の2つ上で都内の大学へ通っているらしい。彼女もアオと同様、僕と（勿論アオとも）仲の良いチャット仲間、メールもする仲だ。

ハドルネームはるりりんだが、そう呼ばれるのが恥ずかしいらしい。僕たちには本名のルリと呼ばせている。
何でるりりんにしたのが謎だ。今度改めて訊いてみよう。

僕はそこでやっとカキコミをする。

『えっ、ルリさんは賛成なんですか？』

『賛成も何も、反対する理由がないしね。あと、楽しそうじゃない』

ルリさんはあっさり返事を返した。

まあ、そうなんだよな。ルリさんの言う通り、反対する理由はないんだけど……

何故、僕は賛成できないんだ？

再び首をひねり、腕を組む。

自分でも何が何だか分からなくなってきた。

「ん」

P Cに対峙して僕は唸っていると、今度はアオがカキコミをした。

『2人とも行くって言うてくれたことだし、いつもの5人でオフ会

やろっか!』

『ちょっと待て! 僕は何も言ってないぞ!』

捏造も甚だしい。別に行かないとも言っていないが、勝手に決められるのは納得できないぞ。

すると、ほぼ同時にカキコミがされた。

『いいじゃん。リュウ兄は結局来るんだからさあ』

『リュウは結局は来るでしょ?』

「……」

2人のコメントに反論出来ない自分が悔しいね、本当に。

僕は仕方なく諦め、気がかりなことを訊ねることにした。

僕は今いる2人を合わせて5人でチャットをすることが多く、それぞれがメールをしたりと、とても仲が良いんだ。

だからさっきもアオが「5人で」と提案したのだが…

『で、後の2人はどうするんだ? まだINしていないみたいだけど』

そう僕は書き込んだ。

2人が来てもいないのに勝手に決めるのは流石に不味いからな。

すぐに返事は返ってきた。

『私が2人に伝えとくよ！ 詳しいことは決まり次第メールするね』

この後、残りの2人の了承を得て、僕たちのオフ会が決まったのだ
った。

そして現在。オフ会当日の時刻は午前10時28分。

全体の集合は秋葉原駅前に12時ジャスト。

しかし、僕は倫畝駅にいる。アオと待ち合わせをしているためだ。

僕とアオは直接会うのは今日が初めてだが、同じ市内に住んでいる。知った時は驚いたが、世間は意外に狭いものだ。

それで、一緒に行こうというアオの誘いもあり、10時30分に駅前集合になったのだが……

「遅い」

思わず呟く。

時間まであと2分も無いと言うのにアオは一向に姿を現わさないのだ。

あいつ、まさか遅刻とか無いよな？

一つの疑問が脳裏をよぎり、僕は口元に手を当てて考える。

そして、数秒――

「……有り得る」

アオのことだから寝坊とかしてそうだな。

あー、考えれば考えるほど心配になってきた。一応電話しとくか？

そう思い、僕は携帯電話をポケットから取り出す。

丁度、10時30分になる所だった。

「ピッ」

———10..30———

刹那、背中が軽く叩かれた。

「ん？」

一瞬、間違って当たったのだと思った。

かなりの混雑だ。そうだろう、と気にせずに見えようとした時……

「……リュウ兄、だよね？」

その声に僕は振り向く。

そこには———

———
美少女がいた。

第1話「始まりの2人」（後書き）

皆さん、おはにんは！

挨拶を全部まとめてみました（笑）

今回は物語を進めるにあたってメイン中のメインになるであろう2人の登場話です！

あくまで”なるであろう”なので、もしかしたら……

と言う訳で、今回はこの辺で。

御静観ありがとうございます。

第2話「友達は美少女!？」（前書き）

さて、いよいよ物語の出発点。

今回は物語的展開はあまり無い話ですが、大事なヒロインの初舞台でもあります！

どうぞ、御静観を。

第2話「友達は美少女!？」

「……リュウ兄、だよね？」

俺が振り向くと、そこには美少女が立っていた。

セミロングの黒髪は、太陽の下で艶やかに光る。若干幼げな顔立ちだが、目はクリッと丸く、鼻筋は彫刻の様に透き通っている。

服装はペザントブラウスに黒のショートパンツと、ボーイッシュな雰囲気が出ている。

正直に言おう。凄く僕のタイプだ。

何でこんな美少女が俺の目の前にいるのかが不思議なくらいに見惚れてしまった。

僕が暫く見ていると、少女は再び声を掛けてきた。

「リュウ兄……那ノ波龍ナノハユウセイ静さん、ですよね？」

自信が無いのか、さっきより畏まった声だ。

そこでふと僕は気付く。

何で僕のことを『リュウ兄』って？ まっ、まさか……

「アオ……なのか!？」

僕は声を震わせながら問う。

この美少女がアオ、ナガセ アオイ長瀬蒼依なのか！！

すると、少女は目を見開き驚いた表情をする。

「そうだけど……やっぱり、リュウ兄だね？」

「ああ」

僕は即答。

本当かよ！ アオってこんな美少女だったのか！！

僕の答えを聞いた後、アオは何を思ったのかどんどん表情がニヤけていく。

何だ？ 僕、そんなに驚いた顔してるのか？

不思議に思いながら突っ立っていると、アオが話し始めた。

「私が声を掛けてもボーっとしちゃうてるから、人違いかと思ったけど」

そして、少し間を取って言葉を続ける。

「もしか、私の美貌に見惚れてしまったな！」

アオはわざとらしく両肩を抱き、一歩退く。

「……そんなわけ、無いだろ！」

まさしくその通りなのだが、僕は気恥しいので嘘をついた。

僕はてっきり、からかいを受けるのかと思っていたのだが、アオは案外素直に答えた。

「だよねー。私、モテた試し無いし」

アオは左人差し指を唇に当てて、僕に笑顔を見せた。

その仕草が妙に可愛らしく、思わず顔を逸らしてしまう。

モテないとか絶対有り得ないだろ、こんなに可愛いのに。

そんな僕の行動を不思議に思ったのか、アオはそのクリクリした目で僕の顔を覗いてくる。

近い近い！！　ちょっと近過ぎるだろ！

いつの間にかアオは少し動けば鼻が触れ合ってしまう距離まで近づいていた。

僕はすぐさまアオから少し距離を取る。

この行動で僕はある程度、察しがついた。

こいつ、告白されても全然気付かない生粋の天然なんだな。

チャットをやっている時から天然な感じはしていたが、ここまで凄

いとは。

僕は苦笑いをし、俺はアオへと向く。

アオは僕の行動が本当に不思議らしく、首を傾げていた。今にも頭の上にクエスチョンマークが出てきそうだ。

そういう所はアオらしいよな。

まあ、何時までこうしてても仕方ないし

「アオ」

と、僕はアオを呼ぶ。

「ほえ？」

アオは再び、首を傾げた。

何か見てて癒されるな、こいつは。

「そろそろオフ会に行こうぜ。みんな待ってるしさ」

「おお、そうだった！ いざ出陣だね」

アオは大袈裟に拳を前へ突き出したかと思うと、僕の手を取り駆け走り始めた。

「おいつ、走るなって！」

僕は走りながら声を掛ける。

「走り出したら止まらないのだ！」

「意味が分からん！」

そう言いながらも走り続ける僕。

僕もアオも笑顔だった。

純粹に嬉しかったのだろう。

ネットでの仲間と現実で会っても変わらないことに。

そして、僕達は駅の人混みへと入っていった。

第2話「友達は美少女!？」（後書き）

音速を超えるスピードで書きました（嘘）

まあ、冗談はさて置きおはにんは！

僕むすも2話になりました。

本文から分かるようにここまでは余談。
次話からいよいよ、物語の幕開けです！

では、次回をお楽しみに♪

第3話「全員集合？」（前書き）

さて、長らくお待たせしました！

この回から、いよいよ全員集合します。

龍靜たちを巻き込む物語……果たしてその先には。

第3話「全員集合？」

現在地、秋葉原駅前。時刻は正午を回ろうとしていた。僕とアオは何の障害も無く、無事に目的地へと着けたのだった。

最初は天然のアオと一緒に迷いそうだ、とか思っていたんだが――

「案外、大丈夫だったな」

そう呟く。

実際、道中は楽しく会話も出来て、楽しく過ごせた。

僕はいくら友達とは言え、初対面だから緊張するだろうと思っていたのだが、常に明るいアオはそんな心配も消してくれた。緊張するどころか、親友のように打ち解けてしまっている。

「みんな、何処だろう？」

僕が腕時計で時刻を確認していると、笑顔でアオが声を掛けてきた。

「そろそろ時間だし、そこら辺にいますと思うけど」

僕は返事をして、辺りをキョロキョロと眺める。

今日集まる5人の特徴などは予め、メールで知らせてある。だから、見渡せば何とか見つけられるはずだ。

事前に写メを送っていれば良いものだが、アオが

『そんなことしたら、会った時の驚きがなくなっちゃうじゃん！
うわっ、こんな顔だったんだ的な』

と言ったのが原因で、しかもそれが可決されてしまったのが問題だった。

「はあ、やっぱり無理にでも写メを貰っておけば良かった」

後悔先に立たず。

今更、何を言っても仕方ないのだが、僕は項垂れる。

すると、アオが僕の肩を叩いた。

「ん？」

「あれ、ルリさんじゃない？」

「えっ、どれ？」

僕はアオの指さした方向に目を向ける。

数メートル離れたオブジェの前に人はいた。

水色と白のボーダーポロシャツにジーンズと言う姿の女性だ。肩にはバッグを掛けている。

事前に聞いていた特徴とも一致する。

ルリさんで間違いないだろう。

「ルリさん！」

アオはすぐさま手を振った。

向こうもこっちに気付いたようで、近づいてくる。

「やつほー、アオちゃんとリュウかな？」

ルリさんはある程度近づくと、そう言ってきた。

そこで、僕は驚く。

遠目では分からなかったが、ルリさんもかなりの美人だった。

アオとは違うタイプで、キリッとした大人の女性の雰囲気を出している。

「は、はい」

僕は緊張気味に返事をした。

アオも『うん』と返事をする。

「わあ、やっぱり。アオちゃんって凄い可愛いね！」

「えっ……そんなことないよ」

ルリさんがそう言うと、アオは顔を赤くさせる。

女の子なんだから、可愛いと言われれば嬉しいんだろう。

続けてルリさんが

「リュウは……予想通り普通だねえ」

「余計なお世話です！」

そう言ってきたので、すかさずツツコミを入れた。

本当にそういうところは余計な人だ。
事実を言われているのが心に痛い。

「ふふふっ、ごめん。ちよつとからかっちゃった。で、そっち子が
ミクかな？」

『?』

僕とアオは不思議な顔をする。

ミクと言うのは、本名は久遠^{くおん}未来^{みく}。中学3年生でアオやルリさんと
同じく、僕たちの仲の良いチャット仲間なのだが――

「何処にミクが？」

今まで僕とアオしかいなかったのだ。

まさか、ルリさんは幽霊が見えるとか！

僕が心の中で怯えているとルリさんが言う。

「ほら、そこにいるじゃない。小さい子」

それを聞き、僕たちは視線を後方の若干下へと向ける。

「あっ」

いた、ちっちゃいのが！

そこには140cmあるかないかぐらいの小さな女の子が立っていた。

豪華そうな白のフリルのワンピースを着た可愛い美少女……いや、美少女だな。

表情は不機嫌さ全快の仏頂面である。

あんまり小さいものだから、視界に入らなかったのだ。

いや、これは中3の身長なのか？ でも、特徴は合ってるしなあ。

僕が苦笑していると、アオが大声をあげた。

「かわいいー！ 人形さんみたい」

そして、ミクと思しき少女を抱きしめる。

少女は仏頂面のまま、されるがままだ。

僕は呆れて、少女に訊ねた。

「君、ミクで良いのか？」

すると、少女は声を発さずにコクリと頷いた。

あくまでも話さないらしい。

確かにネットでも無口キャラっぽい所はあったが、本当に無口だった。

たとは。

そう思考しながら、アオをミクから引き離す。

「いい加減にしろ！ ミクが苦しそうだろ？」

と言っても、ミクは仏頂面なのだが。

「えー、もうちょっと」

アオはダダをこねる。

面倒だなあ。

僕はルリさんに助けを求めようと目を向ける。
しかし、

「ニコニコ」

「……」

「ニコニコ」

ルリさんは笑いながらニコニコと言うだけ。

「あの……」

「ニコニコ」

「あー！ 笑ってるのは分かりましたから、変な擬音語は止めて助

けてください！」

「あはっ、ごめんごめん。アオちゃん？ そろそろ終わりにしないと、この後の時間が無くなっちゃうよ？」

「そっかあ。残念」

ルリさんがそう言うのと、やっとアオは大人しくなる。

はあ。何で、ここには変な人しか集まらないんだ。

僕は溜息を付く。

そして、確認する。

「カズさんが遅いですね」

僕たちのチャット仲間の最後の1人、カズがまだ来ていなかった。
本名は本間和馬ほんま かずまと言い、駆け出しの小説家らしいが――

時計を確認すると約束の時間を15分も過ぎている。

僕が時計から目を離すと同時にミクが袖を引っ張ってきた。

「なに？」

僕は身を屈める。

すると、彼女が耳元で囁いた。

「カズは後で合流すると言っていた」

うわー、凄い綺麗な声してるんだな。無口なのが勿体ない。

ミクの声は鈴の様に綺麗で清らかだった。

「そうか。先に……っておいっ！ カズさんは何て勝手な行動を！」

前々から、自由気ままな人だとは思っていたが、ここまでとは。
ミクももっと早く言ってくれよ！

僕はミクへ視線を送るが、仏頂面のままだ。

何なんだよ、これ。先が思いやられる。

夏空の下、僕は途方も無く嘆くのだった。

第3話「全員集合？」（後書き）

おはにんは！

僕もすもやっとな話を迎えました（拍手）

さて、前書きで全員集合とか書いていながら・・・

すみません。まだ全員集まりません。

では、また次回お会いしましょう（逃）

第4話「始まりの悲劇」(前書き)

今回はこの物語のメイン、シリアス展開です！

ネット仲間の5人に訪れる試練とは！？

第4話「始まりの悲劇」

僕たちの秋葉原巡りは『ひたすら電気街でショッピング』というものだった。

かなりアバウトな計画だと思うかもしれないが、これがアオの人間性だ。

本当にこれで大丈夫なのか？

不安で仕方ない。

しかも、メンバーがアレじゃ尚更――

僕は、少し先を歩く少女3人に目を向ける。

丁度、路頭で勧誘をしているメイドの感想を言い合っているみたいだ。

「あの服、凄く可愛い♪」

「そうねえ。アキバって本当にコスプレしてる娘こがいるのね」

「……………」

三者三様。とても個性的な人たちである。

彼女らは僕のネット仲間なんだが、少々天然な所があって心配ばかりだ。

さっきだってアオが

『うつわあゝ。あれは私が欲しかったレアアイテム!』

とか言っつて、車に轢かれそうになった。

ルリさんやミクだって何処か抜けていて、全然宛てにならないし――

「はあ」

僕は一つ、溜息を吐く。

すると、

「おー、アニメイトじゃない! 入ろうっ」

とルリさんがみんなに声をかけた。

彼女の指す方向をみると、確かにアニメイトの看板がある。

アニメイトというのはアニメや漫画、グッズと言った二次元専門店みたいなものだ。

所謂、オタクの聖地か?

「いこー!」

「……………」

アオは拳を突き出し、ミクは無言で頷く。

そのまま、僕たちは買い物を楽しむのだった。

電気街での買い物を終わらせ、早数時間。時刻は15時を回っていた。

無事でこの場にるのが奇跡だと思えてしまう。

僕たちは近くのファーストフード店で休憩をしている。

アオとルリさんが仲良く会話をし、ミクは終始無言。
変わりない風景だ。

1つ疑問なのは、ミクがいつも僕を睨んでいる気がするんだけど

――

「……………」

「……………ん」

あっ。今、目があった。

途端に目を逸らすミク。顔も若干、赤い気がする。

僕は何かしたのか？

そう考えていると、ふいに思い出した。
そして、その場で勢い良く立ち上がる。

「あああああ！！」

あまりにも大声を出した為に、周囲の目が一気に僕へと注がれた。

「え、あつ……すみません」

凄く恥ずかしくなった僕は、すぐにその場へ座り込む。

うわぁ、恥ずかしい。

「いきなり、どうしたの？」

ルリさんが心配して訊いてくる。

その目は止めてください！ その痛い子だぁ、みたいな目は止めて
！？

僕はそんな心の訴えをグッと堪えて、思い出したことを話す。

「あの……忘れてません？ カズさんのこと」

そう。

集合時に後で来ると聞いていたカズさんが、未だに顔を見せていないのだ。

「あつ、そう言えば」

「いないね。カズくん」

ルリさんもアオも本当に忘れていたようで、アツケラカンとした表情をしている。

心底同情するよ、カズさん。

「それにしてもカズさんは一体何処へ……」

考えていると、ミクが僕の裾を引っ張った。

「ん？ どうした、ミク」

小柄な彼女へ合わせるように、少々身を屈める。
すると、ミクは携帯電話を見せてきた。どうやら、ワンセグに繋がっているようだ。

「何か、映ってるのか？」

僕は、何気なく画面を覗き込む。
と同時に息をのんだ。

「……………っ!？」

「何かあったの？」

アオとルリさんも何事かと、こちらを覗いてくる。

「えっ、何よこれ」

驚愕する2人。

それもそうだ。

画面に映されていたのはニュースの速報だった。それも秋葉原で現在起きている、人質をとった立てこもり事件の。

それによると、犯人は歩行していた数名を刃物で刺して、1人を人質に立てこもったようだ。

大惨事じゃないか。

しかし、重要なのはそこではなく、その人質というのが――

「カズさんだ……」

アオが呟く。

そう。その姿から明らかに本間和馬――カズさんだったのだ。

どうするんだよ、これ。

僕は途方に暮れた。

友達が、仲間が事件に巻き込まれている。

それを見過ごせない自分と問題に関わりたくない自分とがいた。

どうするどうするどうするどうするどうする

頭がグチャグチャで思考が定まらない。

そんな時、アオが言った。

「現場に行かない？」

「えっ？」

その言葉に空気が固まる。

しかし、彼女は続けて言うのだ。

「友達が危ない目に遭ってるのに、ここでグダグダしてても仕方ないよ！」

その声は力強く、本気だった。

すると、

「そうね、行きましょう！」

ルリさんが声をあげ、

「……私も」

無口なミクも答えた。

後は、僕だけ――

数年前の出来事が脳裏を過る。

僕の救えなかった命。
力の無かった僕。

でも、今はどうだ？
何か出来るんじゃないのか？

僕は周りを見渡す。

アオ、ルリさん、ミク。

彼女たちが僕の返事を待っている。
だから、僕は答えた。

「行こう、カズさんの所へ！」

第4話「始まりの悲劇」(後書き)

おはにんは！

書いているうちに

「あれ？ シリアスと言うか熱血っぽく……」

とか思ってしまったことは気にしない↑

とりあえず、物語も重要な場面に駒を進め始めました！
次回もお楽しみにノシ

第5話「現実の時として」(前書き)

久々の更新。

今回は閑話的なノリになってしまうかもしれません。

第5話「現実とは時として」

カズさんの一大事に駆け付け付けたのは良いのだが、当然のことながら現場は警察によって包囲されていた。

周囲には野次馬も大量に集まっており、包囲網のすぐ傍まで来るのがやっとだった。

流石に一般人の僕達はこれ以上先へは行けない。

「しかし、参ったなあ」

先程『助けに行くぞ!』なんて、啖呵を切ってしまったのだ。かなりバツが悪い。

「どうする?」

僕は仕方なく、他3人に意見を求めた。これで解決できるとも思えないのだが……

すると、アオが勢い良く挙手をした。

「裏道を探そう!」

「他に意見はあるか?」

僕は他の意見をナチュラルに求める。

「って、何でスルーするの!?」

「裏道なんてゲームみたいなのが現実にある訳ないだろ!」

まったく……論外だから無視をしたのに。

「えー、秋葉原なんだから、ゲームみたいなものがあるかもよ?」

まだ言うか。

「ある訳ないだろう。秋葉原も現実の1つだ」

「いや、あるかもよ?」

そこにルリさんまで入り込んでくる。こうなると、収集がつきにくいぞ、おい。

時間を掛けない為に無視したのに、かえって時間を割いてないか?

「ルリさんまでふざけないでくださいよ! カズさんの命がかかってるんですよ?」

僕は湧き上がる焦りを抑えながら、冷静に論ず。

しかし、これからどうしたものか。

助けるにも、近づけなきゃ論外だろうに――

「……………」

周囲の騒音だけが響く。

あの二人もふざけてはいたが、心からカズさんを心配しているのだ。

黙り込んでから数分。

何やら、僕の服を引っ張った。

「ん？」

僕はその方向へと目を向ける。
そこにはミクがいた。

「何だ？ 良い案でも思いついたのか？」

すると、ミクは僕の腕を引っ張って、歩き始めた。

「お、おいっ！ 引っ張るなって」

僕は前のめりになりながら、ミクへと付いていく。

「どうしたの？」

考えていた二人も僕達に気付いたのか、付いてきた。

路地を歩くこと約10分程度。

ミクは唐突に歩みを止めた。

「つと。ここに何かあるのか？」

立ち止まった場所は、現場から道を隔てて向かいのビルだ。
格別変わった物ではないし、むしろ現場から離れているのだが。

「……………ん」

僕が聞くと、ミクはビルの中を指差した。いや、正確にはとある場所を。

「あっ……」

アオが情けなく呟く。

言い方が失礼だな。アオが言わなきゃ僕が言っていただろう。当然だ。目の前には地下通路への階段があったのだから。

そう。事件現場となっているビルは、知るオタクこそ知る「地下繋がり」のビル」なのだ。

ネーミングセンスはともかく、見る限りでは、警察はこの道の存在を知らないらしい。

抜けてるなあ、秋葉原の警察も。

そのおかげで現場へ行けそうなのだが。

何か本当にゲームみたいな展開だよ……

そう思いつつ、

「お手柄だ、ミク！」

僕は嬉しさのあまりミクの頭を撫でた。と、同時にミクは顔を沸騰の如く赤くさせる。

「えっ、あっ、ごめん。つい」

僕は慌てて、手を離す。

「男にいきなり頭撫でられたら嫌だよな」

すると、それを見ていたルリさんに『分かってないなあ』と言われた。

アオも溜息を吐いてる。

何かしたか？

「とにかく！　ここからカズさんの所へ行こう！」

4人は通路へ向けて走り出す。

二度と失わない。何一つとしても。昔とは違うんだ。そう、僕は心に誓った。

第5話「現実の時として」（後書き）

おはにんは！

リアルも時としては二次元化するんだ！！

と希望を込めたこの話。

空から美少女か奇怪な生き物が降ってくると嬉しいなあなんて（笑

さて、今回はこの物語の醍醐味が舞ってきます。

人物プロットの段階ではそうではなかったのですが、この作品は何
と言ってもその場の勢いで書いています。

残念ながら、プロットが役立たずな時もあります。

と言うことで、謎の第6話までお楽しみにノシ

第6話「抗えない普遍」(前書き)

シリアスモード全開の6話。

今回はどんな物語になるのか！

第6話「抗えない普遍」

事件現場のビルは閑散としていた。

犯人が立て籠もっているのだから、当然と言っちゃ当然なのだが、いざ目の前にすると酷く印象に残ってしまう。

犯人とカズさんがいるフロアまであと少し。

僕たちは階段を昇っていた。

「……………」

みんな、今の重大さを理解している様で、沈黙を守っている。嫌な汗が僕の額を滴る。

冷房は効いてるはずなのに、どんどん暑さが増してくる。自分は緊張しているんだと悟る。

それもそうだ。人の——仲間の命がかかっているんだから。

細心の注意を払いつつ、何とか目的のフロアへと到達できた。ここまでは何の問題もなかった。

しかし、大事なのは『ここからの行動』なんだ。

僕は他の3人へと確認を取る。

「大丈夫か？　ここからが1番大事だぞ」

「大丈夫だよ！」

「問題ないわ」

「……うん」

三者三様ではあったが、強い意志を感じ取れた。
それだけで、大丈夫な気がしてくる。

そうだ、『あの時』とは違う――

強くそう思えた。

僕は指で合図を送ると、フロアの奥へと歩み始めた。

犯人のいる部屋は、その他と逸していた。

何が？ と聞かれると説明が付かないが……そう、空気の凍ったような、そんな雰囲気。

犯人とカズさんの姿が目に入った瞬間、心臓が破裂するんじゃないかと思うぐらい心拍数が上がった。吐き気もする。

すると、

「ねえ、大丈夫？ リュウ」

ルリさんが背中 hands を当てて、心配してくれた。

僕は懸命に心を落ち着かせ、冷静を繕う。

「だ、大丈夫です」

これから、カズさんを救う作戦を決行するんだ。
根をあげてはいられない。

僕たちは話し合った通りの位置に隠れる。

あとは、作戦開始を待つだけだ。

作戦の内容は単純。

犯人がカズさんに刃物を向けている以上、注意を他に逸らさなくては
いけない。

そこで、アオとミクが囷になる。

注意が2人に向いている間、男の僕と空手経験者のルリさんが犯人
を抑える。

シンプルなものだが、これしか方法はない。

出来ることを全力でやれば、結果は絶対に見出せるんだ。

緊迫する空気。1秒1秒が長く感じられる。

ゆっくりと僕は呼吸をする。

落ち着けと言ひ聞かせる。

そして――

「犯人ー!!」

アオが叫んだ。

横にはミクもいる。

「誰だ、お前ら！」

犯人は2人に気付き、刃先の向きを変えた。

今だ!!

僕とルリさんは同時にカズさんへと向かう。

極限状態の時、動きがスロー再生に見えるという話は本当らしいな。
全てがゆっくりと、ミクロに動いていく。
じれったい程に細かに動いていく。

「何っ！」

犯人は僕たちに気付くが、遅い。

既に、カズさんはルリさんが救出していた。

僕も犯人を押し倒す。

と同時に、刃物も床へ滑っていく。

「みんな……」

カズさんは僕たちの登場に啞然としている。

それを見て、僕は立ち上がる。

「やった、成功だ！」

誰一人傷付けずに助けられたんだ！
もう昔の自分じゃないんだ！

その時はどうかしていた。

カズさんを助けただけじゃ終わりではなかったのに。

浮かれた僕は気付けなかったんだ。犯人が拳銃を僕へ向けていたことに――

「くっそおおおおお！」

「きやあああああ」

犯人の雄叫びとアオカルリさん……いや、ミクだったのかもしれない……の悲鳴が聞こえる。

僕が振り向いた時には、既に引き金を引く瞬間だった。

終わった。

純粹にそれだけ思った。

後悔なんて浮かばない。ただ、死という現状を捉えようとしている自分しかない。

でも、その時にもう1つの声が聞こえた。

「リュウウウウー!!」

——そして、気付けなかった。

自分の命より他人の命を重視していた人間がこの場にいたことを。

「パーーーーーン」

乾いた銃声が室内に響く。

その後に迫る静寂。

「……………えっ」

視界が紅く染まった。

世界が紅く塗り潰された。

僕の『血』じゃない。

目の前に倒れる、助けられたばかりのカズさん。

彼の体からドクドクと泉のように溢れる『血』

普遍的、凡庸な人間は死に抗えないんだと嘲笑うように流れる『血』

「あ、ああ……………」

『本間和馬は死んだ』

誰とでもない何かが、そう告げた。

第6話「抗えない普遍」(後書き)

おはにちは！

はい、かなりシリアススイッチが入りましたね。
今後のリュウ達の運命は如何に！？

では、また次回ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5853u/>

僕たちが結ぶ物語 -the beginning story-

2012年1月10日01時52分発行